

庭野平和財団助成事業報告書

被助成者：公益財団法人とよなか国際交流協会

コード番号：13-A-226

多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクト（EMP）2013 （別名「トモダチ作戦」）

◆活動の背景と目的

とよなか国際交流協会（以下、協会）は、「市民の主体的で広範な参加により、人権尊重を基調とした国際交流活動を地域から進め、世界とつながる多文化共生の社会をつくる」を理念に掲げ、1993年、豊中市によって財団法人として設立され、2012年4月1日からは、公益財団法人に認定された公益目的事業を多くの市民協働者とともに展開している。また、協会設立と同時に豊中市によって設立されたとよなか国際交流センターの管理・運営も行っている（2011年度より指定管理者となる）。

協会事業は、地域や学校をパートナーに「地域づくり」「人づくり」を推進しながら総合的な外国人支援の「しくみづくり」を目指す27事業で構成されている。柱となるのは、地域に住む外国人のための日本語交流活動、多言語スタッフによる相談サービス（タイ語・フィリピン語・スペイン語・ポルトガル語・インドネシア語、韓国・朝鮮語・中国語・英語）、外国にルーツをもつ子どものためのサポート事業などである。特に外国人にとっての「安心やエンパワメント（なくされた力を取り戻すこと）」「自己肯定感」「ピア（同じ立場の仲間）やロールモデル（目標となる生き方のモデル）の育成」などが重視される。

子どもサポート事業が展開される背景には、豊中市が外国人の少数点在地域であることから外国にルーツをもつ子どもたちが同じような背景をもつ仲間に出会うきっかけや、自分の文化的背景を積極的に押し出せるような機会が少ないことがある。そこで、母語や母文化の学習を通じて、仲間と出会い、自尊感情を高めるための「子ども母語」（インドネシア語・スペイン語・ポルトガル語・中国語）、大学生ボランティアと勉強や表現活動を行う「サンプレイス」などが実施されている。豊中市教育委員会との協働では、2006年より外国につながる子どもやその保護者、学校教員を中心とするおとながつどい、交流を深めるための「多文化フェスティバル」が年に1回開催されている。

豊中市には、1970年代頃から在日韓国・朝鮮人教育や帰国児童生徒教育に熱心に取り組んできた土壌があり、近年はいわゆる新渡日の子どもの教育にも目が向けられてきた。しかし、多文化な子どもたちが文化的な背景を押し出して自分を表現することのできる場や機会はまだまだ少ない。他方で、従来のような「在日外国人の子ども」と一括りにすることができない現実が、子どもたちの生活実態や意識において現れ始めているのも事実である。親の定住化傾向や国際結婚、日本国籍取得などの増加により、日本生まれ・日本育ち、ダブルの子ども、日本国籍の子ども、また母国と日本を往来する子どもなどが増えており、生育環境、家族形態、国籍や名前において、グローバルに多種多様な「外国につながる子ども」が存在している。そうした子どもたちには、国家、国籍、ルーツ、ことば、文化がひとつに固定されない、多様な文化で構成される活動やそのような自分自身が肯定されるような取り組みが必要とされているが、子どもたちがもっとも多

くの時間を過ごす学校現場について見れば、プライバシーの問題で子どもの背景をつかみにくくなり、「外国につながる子ども」の存在が潜在化する傾向にある。

こうした背景のもと、2012年度から庭野平和財団の助成を受けて多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクトに取り組んでいる。協会に集う外国につながる若者たちが中心となって映像作品制作を行うなかで、子どもや若者たちが仲間と出会い、それぞれの文化的な背景や多様な文化の織りなす自分自身を積極的にとらえ、さまざまなかたちでの発信方法を身につけることを目指している。

2013年度は、2012年度完成した映像作品「ナニジン？—トモダチ作戦」をさまざまな場で上映し、社会発信と対話、ネットワークの構築を進めてきた。同時に、外国につながりのあるひとりの若者の「経験」と「想い」に焦点をあてた新たな作品づくりにも挑戦した。また、主流メディアから一方的に与えられる「外国人」のイメージや価値観ではなく、自らが表現し発信することを通じて、「外国につながる子ども」たちを潜在化させる社会へ問題提起することも目指した。

◆研究活動の内容と方法

2012年度にはじまった本プロジェクトは、別名「トモダチ作戦」という。潜在化する外国にルーツのある子どもや若者たち（「ダブル」「クォーター」「混血」等）の存在を発信し、メディアを用いたネットワークやつながりを生み出すことを目的にスタートした。メンバーは、外国にルーツがある若者が中心となって、メディア研究者や日本人など関心を同じくする者が集まっている。2013年度は前年度のメンバーに加えて、つながった「トモダチ」がメンバーに増えるなど、さらなる展開を見せた。

(*本プロジェクトでは、あえて「混血児」という表現を使用している)

(1)映像作品の広報、上映、交流

昨年度制作した映像作品「ナニジン？—トモダチ作戦」の上映会を主催したり、依頼された講演と一緒に上映の機会を設けるなどして交流をおこなうほか、DVDを鑑賞した人びとから返事をいただいたりと、多くの人びとに見てもらう機会を得た。

(2)研修及び対話

メンバーが表現やメディア、若者支援や居場所づくりについて学ぶ機会をつくった。メンバーそれぞれの立場や経験、思いを共有することを何より重視し、毎回の集まりで日常的に実施した。

(3)映像作品制作

新たな制作活動として、一人の若者に焦点をあて「沖縄」をめぐる撮影合宿を企画し、実施した。一人の若者の経験や思いをメンバーで共有し、どのような映像作品にしていくか、編集作業で何度も話し合いを行った。

(4) 社会提起や提案

講演や上映を通じて、これまで以上に伝えたいメッセージやプロジェクトの目的が明確になってきた。豊中市や外国人支援にかかわる団体をはじめさまざまな関係機関への発信を進めたり、新聞に活動が掲載されるなど、少しずつ社会提起の場が増えた。

◆活動の実施経過

①『ナニジン？—トモダチ作戦』の頒布と反響

2012 年度に制作したオリジナルの映像作品「ナニジン？」は、要望や注文があるごとにメンバーで DVD パッケージ化作業を行ってきた。これまで約 80 セット以上を頒布した。外国人支援活動にかかわる団体や個人、教員からの依頼が多かった。技術的な問題（音が聞き取りにくいなど）への指摘がいくらかあったが、特に外国にルーツのある子どもにかかわっている人からの反響は良かった。メンバーの一人が新聞記者に取材され、本プロジェクトについても記事で取り上げられた（資料①参照）。

以下に抜粋するのは、人権学習会で「ナニジン？」を上映したいと連絡をくださった方からのメールの一部である。



『ナニジン？—トモダチ作戦—』
(2012 年制作、DVD、10 分)

DVD「ナニジン？—トモダチ作戦」に対する私の思い

この DVD に出会ったのは、2013 年度の「在日外国人教育研究集会」でした。3 月まで私は小学校で、人権・同和教育担当の教育をしていました。児童の中に、韓国にルーツのある兄妹がいて、その子たちと豊かな関係を築きたい、その子たちの学びを保障したいと思って研究集会に参加しました。その全体会の中でこの DVD に出会いました。

「ナニジン？」という質問が、こんなに深く広い意味をもつ言葉だということを知り初めて実感しました。何より自分自身が振り返る機会になりました。今まで「ナニジン？」と問いかけるとき、どういうつもりだったのだろうか？きちんと相手をよく知ろうとしていたのだろうか？と自問しました。私自身も、朝鮮半島かあるいは中国にルーツがあるかもしれない人間です（「かもしれない」というのは、情報が足りないためにはっきりとしないという意味です）。そういう自分を言い表すのに「〇〇人」の一言では足りません。そのことから、相手の人格を尊重するためにも、「ナニジン？」だけで済ませてはいけないのだと知りました。

外国にルーツがある人と分かり合うために、また、自他の人格を尊重し合うために、この DVD を使わせて頂き、参加者とともにより豊かな学びを築きたいと考えました。

DVD 使用の目的・意義

この DVD の特徴は次の 2 つだと考えます。

- ・ 「ナニジン？」という問いに関わる思い込みに気付くことができる。豊かな生き方があることを知るきっかけになる。
- ・ 「より多くの人と分かり合いたい」という願いのこもった語りがある。広く社会全般を見ると、悲しいことに、「ナニジン？」という質問が、相手との関係を切るために使われることがあります。「ナニジン？」という問いが、相手といかに離れた関係か確かめるためにされてしまうことがあります。私たちは「ナニジン？」に対する答えの背景に多様な、豊かな生き方に目を向けなければなりません。

この DVD は、外国にルーツがある人に対する思い込みに気付くことができます。学習のきっかけとして、参加者が自分を振り返るために使いたいと思います。

また、この DVD は「相手のことをよく知りたい。自分のことをよりよく知ってほしい」という思いに触れることができます。「ナニジン？」という質問は、あくまで関係を深めるきっかけとして、さらに相手をよく知ろうとするための学習内容につなげていきたいと思います。

②『ナニジン?』の上映を通じた交流

●11月1日 高校3年生向け人権講習会での講演

メンバーの2人が高校3年生に向けて、昨今の国際結婚とその間に生まれてくる子どもの状況と自分たちのライフストーリーを合わせて紹介し、「ナニジン?」を上映。どのような想いで制作したかを伝えた。



講演後、高校生と集合写真

●11月17日 とよなか国際交流センターにて文京学院大学生（ゼミ担当教員：登丸あすかさん）との交流

メディア・リテラシー研究者である登丸あすかさんのゼミ生による「東京の屋外広告に登場する外国人の分析」の発表の後、「ナニジン?」の映像作品を上映した。「ここにいる人はナニジンでしょうか?そして何歳でしょうか?」というメンバーの問いに対し考えてもらい、どのような想いでこの映像作品を作ったのかを伝え、意見交換を行なった（以下は感想の一部）。

- ・ 自分たちはこの発表のための調査をするにあたって、「偏見・見た目・多数決」などあいまいな基準で「日本人」「外国人」を線引きしていたのではないかと思った。
- ・ 自分の中では「ナニジン」というのは身分証とか書類状のことだと思っていたけど、自分が「oo人」と思っていたら「oo人」なのかなと感じた。

ゼミ生からは後日、「ナニジン?」を通じた交流の後で変わった考え方や価値観を取り入れて、answer 映像作品が届けられた。

●1月13日 豊中市成人式会場における記念行事「だけじゃないSEIJN」への出店

2013年豊中市成人式会場で市民企画の記念行事として、「ナニジン?」の上映を行なうブース



成人式会場の一角で「ナニジン?」を上映

を出店した。豊中市の外国籍の新成人は約50人（新成人全体は約3700人）であるが、外国にルーツのある若者はそれ以上であることが想像される。若者たちがつながる場を生み出そうと上映を行なった。「祖母が中国人」と声をかけてくれる新成人、「父親がダブル」という市役所職員、「祖母が韓国人。わたしはクォーター?」と聞いてくる中学生など、交流することができた。

また、日本で暮らす外国人としての経験や想いを広く知ってもらうため、メンバーの「経験」をパネルに展示し

た（以下、メンバー3人のパネル展示より抜粋）。

- ・ 法事が向こうの国のやり方だったりして大変
- ・ 墓参りが大変
- ・ 親が向こうの国に墓を作ってほしいとか言い出してくる
- ・ 向こうの国との国際関係にひやひやする
- ・ ハーフと言っても「へー」としか言われない
- ・ 外見でわかるハーフたちとの「あるある話」ができないことがある
- ・ 同じ国のハーフと出会っても相手によっては共感しあえないことがある
- ・ 「ハーフ、いいよね」のハーフは自分のことじゃない
- ・ 自分がハーフであると紹介する時に少し後ろめたくなる
- ・ 誰かと話すときに自分の立ち位置をいちいち気にする
- ・ アイデンティティを持つとするために無理にハーフであることを強調してしまいがち
- ・ 自分に子どもができたらどうルーツについて説明していいか悩む

- ・ 「日本語がお上手ですね」と言われる
- ・ 英語圏にルーツがないのに「英語しゃべれる？」と聞かれる
- ・ 「しゃべれない」と答えたらがっかりされる
- ・ スポーツの試合で「日本と〇〇、どっち応援する？」と聞かれる
- ・ うた、ダンス、スポーツ万能と思われる
- ・ 道をきかれない
- ・ 浴衣で夏祭りに行くと仮装と思われる
- ・ 「日本で生まれたなら日本人だよ」と国籍を決められる

- ・ 近所の薬局の店員がやたら「OK？」と聞いてくる
- ・ 外国人観光客が英語以外の言語で道を聞いてくる
- ・ 納税意識高め
- ・ お茶とコーヒーが選べるのにコーヒーを勧められる
- ・ 「〇〇料理をつくってくれ」と言われて困り果てる
- ・ 故郷に帰ると観光客と思われる
- ・ ルーツを連想させる食べ物はあえて食べない

●2月10日 アメラジアンスクール in オキナワでの講演と上映

アメラジアンスクールはアメリカ人とアジア人を親に持つアメラジアン子どもたちが「ダブル」の教育を受けられるようにと、母親たちの願いと想いによって1998年に設立された学校である。本土と沖縄という違いはあるものの「ナニジン？」に出てくる子ども・若者たちと同じような子どもたちが多く通っている。作品が完成したとき見てほしいと強く思った人たちでもある。沖縄に視察研修・撮影合宿で訪れることになり、スクールで上映と交流の機会を得た。

（それ以外に、龍谷大学、全国外国人教育研究協議会、教職員向け研修会等で上映を行なった）



アメラジアンスクールでのダンス交流

③研修やミーティング

外国人の表象分析やオルタナティブメディアについて考える学びの場をもった。また、識字の活動や若者支援に取り組む講師から、外国にルーツがある子どもや若者の居場所づくりのヒントを学ぶ（12月15日：阿部寛さん「架橋のこぼれ」ひとりでありつづけること、かたわらに立つこと）。

講演会や上映会、撮影などのイベントの合間をぬって、月に2～3回ミーティングを開催した。「ナニジン？」の反響をみなで共有し振り返りを行い、新作の企画を話し合った。こうした時間のなかで、外国にルーツがある子どもや若者が集い、語り合い、つながることを大切にした。

新作の企画の話し合いで「それぞれ思いいれのある場所、ここで撮りたいという場所」に「沖縄」や「北緯38度線」などが挙った。また、メンバーの日常生活を撮りためて、後で形になってくるものを作品にしていくという手法（「観察映画」）はどうか、などのアイデアも出る。



ミーティング・対話

④新作の撮影・分析・編集（「沖縄作戦」）

最終的にメンバーの一人（仮名：ジェームズ）に焦点をあて、かれの「過去・現在・未来」をテーマに取り組むことになった。かれにとっての「過去・現在・未来」が示される場は「沖縄」。メンバーで沖縄撮影合宿を行うことになった。

◆「沖縄作戦」が目指すあらたな作品づくり

●作品コンセプト

新作の中で焦点をあてることになったジェームズの「過去・現在・未来」をたどる「沖縄作戦」。作品のテーマや概要は以下の通りである。

「ジェームズと沖縄と過去・現在・未来」

「混血児」であるジェームズがパートナーと息子、メンバーとともに沖縄を訪れる。沖縄はかつてジェームズがアメリカ人の「同朋」を求めて向かった地、そして挫折した地でもある。なぜジェームズはずっと沖縄に引き寄せられてきたのか、なぜ大阪に帰ってくることになったのか、なぜ今回息子たちとともに訪れることにしたのか。さまざまな想いのある場所を訪れ、現地でつながりのある人たちに語ってもらうなかで、見る人が何かを感じとることができる作品とした。

本プロジェクトの前作「ナニジン？—トモダチ作戦」は、多くの「ハーフ」「クォーター」たちの思いを短くちりばめた作品だった。それを出発点として、今回はジェームズの経験を深く掘り下げている。沖縄との関係を振り返りつつ未来に向けたものを探る姿を通して、見えなくされて

いる「混血児」「アメラジアン」の存在を見えるようにし、同じような背景をもった人たちに、ここにいるよ！と呼びかけることが目的である。

(2014 年完成予定作品)

●スケジュール

ダブルやクォーターなど外国にルーツがある若者、メディア・リテラシー研究者、職員等の 8 人で 2 泊 3 日の撮影及び視察研修を行なった。スケジュールは、以下のとおりである。一日目は悪天候に見舞われて飛行機が大幅に遅延し予定変更を余儀なくされたが、その後は予定通り、無事に行程を終えることができた。

日程： 2014 年 2 月 9 日～11 日

参加者： 外国にルーツがある若者 5 人、研究者 2 人、職員 1 人

2 月 9 日	午前	伊丹空港発
	午後	→那覇空港着
2 月 10 日	午前	平和祈念公園を訪問 琉球大学教員を訪問
	午後	アメラジアンスクールでの講演と交流 嘉数高台公園を訪問 大学時代の友人と交流
2 月 11 日	午前	那覇空港発
	午後	→伊丹空港着

◇平和記念公園を訪問

一日目は天候に恵まれず、二日目から本格的な活動の開始となった。午前中は平和祈念公園（沖縄県糸満市）の平和の礎を中心に、撮影を行なった。

◇琉球大学教員を訪問

本プロジェクトメンバーと以前から関わりのある琉球大学教員を訪問し、ジェームズの過去の話を中心とした聞き取りや意見交流を行なった。

◇アメラジアンスクールでの講演と交流

アメラジアンスクール・イン・オキナワ（沖縄県宜野湾市）にて、ジェームズがアメラジアンの「先輩」として、10 代後半の生徒のクラスで 1 時間ずつ（計 2 時間）講演を行なった。その後、本プロジェクトメンバーとスクールの生徒たちとの語らいや交流の場をもうけた。



琉球大学教員を訪問



スクールでの講演

◇嘉数高台公園を訪問

スクール訪問後、宜野湾市にある嘉数高台公園へ向かった。特に、地球儀をイメージした展望台にて風景や語りの撮影を行なった。



展望台での撮影

◇大学時代の友人と交流

二日目の夜は、ジェームズの大学時代の友人との交流を行なった。大学時代の想いや、友人からみた当時のジェームズについて、ざっくばらんとした雰囲気の中で語りながら交流し撮影した。

●「沖縄作戦」に参加して感じたこと（メンバーの感想）

★ジェームズにとっての沖縄が、どんなところだったのか、少し分かった気がしました。私にとってのどこだろうか...?と考えました。と同時に、こんな風にそれを私たちに共有しようとしてくれることが嬉しかったし、凄いと思いました。自分の想いを伝えていける、届けようとする、そういうところがジェームズのすごいところ。だから、トモダチが増えていくのかなと思いました。

★ジェームズのことをちょっと解った気がする。

★アメリカンスクールに行って、そこにいる混血の子たちと出会って、今までは混血の人と出会ったときに、混血であるってことで

繋がりを感じたり、多くのことを共感し合えると思っていたけれど、色々あって彼らと混血としての様々な違いを大きく感じた。ただ、その違いはたぶん、彼らもスクールから卒業して、本土に行くようなことがあった時に、混血の人と出会ったら感じることだろうし、苦悩する部分だと思う。だからその違いっていうのをお互いが理解し、認め合い、友だちにならないと、混血同士でいがみ合うことになりそうな気がした。そのなかで自分の役割はちゃんとあるような気がした。

★この島でとても多くの人が戦争で亡くなったということを考えると、戦争の悲惨さを改めて感じた。



平和記念公園にある“平和の礎”での撮影

●作品の編集状況

撮影は終了し、現在編集の段階である。映像のみ仮編集したものをメディア関係者との交流会等にて上映し、そこでいただいた意見や感想等も参考にしながら、今後テロップやナレーションを加えて仕上げていく予定である。

◆活動の振り返り（感想より）

2012年に完成した映像作品「ナニジン？ートモダチ作戦」の制作を通じて私はかけがえのないトモダチを得る事ができました。そしてその作品の中で私が言っていた言葉に「言うのに力がある事を言い合えるのがトモダチ」という言葉があります。口では簡単に言えますが実際に出来るまでは映像作品が出来上がってからさらに長い時間がかかりました。その言葉が実行出来たのが2014年の沖縄への撮影旅行でした。

私の祖父は戦後日本に進駐していた米兵で、高校生の時にそれまで否定し続けてきた自分のルーツと向き合う事が出来るようになりました。そのルーツというのは「アメリカ」と「日本」という解りやすいものだけではなく、「基地」や「戦争」なども私にとっては大切なルーツの要素であり、私自身を語る上で切っても切れないものです。そして大学進学に際して「自分と同じアメリカン仲間になりたい」「基地がある街を感じてみたい」と強く思う様になり、沖縄の大学に進学する事にしました。しかし大学に進学して沖縄に住み始めるとあらゆる壁にぶつかりました。現地のアメリカンとの違い、米兵関連の事件、基地と沖縄の交流と軋轢、今まで自分のアイデンティティとして「なんとなく調和」していたものが沖縄では不協和音をたてている、そう当時の私は感じ沖縄から消えてなくなりたいと思う様になりました。そして大学2年の時に中退を決意して大阪に帰ってきたのです。2008年の事でした。

この沖縄での挫折の経験が、いろんな意味で今の私の基礎となっています。その基礎であり、避けては通れない沖縄の地を現在一緒に活動しているトモダチと共に訪ねるのは本当に力がある事でした。でもこのトモダチなら訪ねられる、このトモダチだから訪ねたい、活動を通じてそう思えるトモダチに出会える事ができました。またこの経験の映像作品を通して、多くの人に何かを感じてもらえればと思い、これからも活動を続けていきたいと思えます(J)。

僕はネットを使ったハーフやクォーターの人達のためのコミュニティ作りをしていました。その活動も8年近く続けていましたがイベント的なものしか出来ず、またネットでの繋がりということもありトラブルが絶えない状態でした。その時に一緒にやらないかとお誘いがあり、参加していくうちに一人で抱え込まず仲間協力し合いながら作品を作り上げていく大切さ、定期的に集まれる場所の必要性、意見を交わしながら認め合うことの重要性を学ぶことが出来ました。その中で「沖縄作戦」で一人の混血児が自分の過去と祖先のルーツを見つめ、葛藤しながら前に進んでいく姿を見て、同じ混血児として色々と考えさせられることが多かったです。今年度は作品を完成させ、それを元に様々な方と繋がり、交流できればと思っています(K)。

第1弾の映像作品「ナニジン？」は、自分を一言で「日本人」「外国人」と分けられない人達がたくさん出てきます。私もその一人でした。そして「ナニジン」を制作するまでは、自分の葛藤や気持ちをわかってくれるのは同じルーツ、悩みを持つ人だけだと考えていた時期もありました。今思えば、その考えはとても閉鎖的だと思いますが、「そうじゃない」と強く思わせてくれたのは「ナニジン」を一緒に制作してくれた周りのトモダチでした。

メディアや社会が売り出す「ハーフ」「クォーター」は、何か国語も話し、スタイルが良く、堀の深い長身イケメンもしくは美女であることが多いと思います。しかし、そんなイメージとはかけ離れた、日本で生まれ育ち、関西弁をしゃべり、華やかさに欠ける「ハーフ」や「クォーター」、外国にルーツの持つ若者が日本には多く存在します。

ジェームズや私は、どこかに属することのない、社会から見えなくさせられている「ハーフ」や「クォーター」、外国にルーツを持つ若者が見た時に、自身も葛藤やモヤモヤした気持ちを持ってもらえたら良いな、と考えています。

いわゆる「日本人」「外国人」、自分は当事者ではないと考えている人にも、「あなたはナニジンです

か？」という一見単純な問いに、すぐに返答できない人がいるということ、なぜこんなにも悩むのか？という疑問を持ってもらえたら、と思っています。

まず第一段階として、「ここにいること」をアピールしたかったのです。

そして、2014年2月には、「ナニジン？」にも出演していたジェームズが自分の見つけたトモダチと共に自身のルーツと関わりのある沖縄でトモダチ達にさまざまな話をしてくれます。モヤモヤした気持ちや葛藤を持ち続けていたジェームズが、トモダチと出会いつながることへの思い、また私も含め周りのトモダチ達のジェームズへの思いがぎっしり詰まった作品になっています。

私自身、正解がないとわかっているものを伝えるために、映像制作の技術的には素人に近い自分達がこんなにも模索しながらやり続ける意味はあるのか、と思ったことがあります。だけど、やめたくないとも思っています。それはやり続けることで出会えたトモダチ、仲間がいたからです。このつながりは、やり続けることで強くなり、ひとまわりもふたまわりも広がっていく、という確信があるからです。

自分達を見えなくしているメディアや社会に対して、そんな中で葛藤する若者に対して、私達はこれからも映像を通して社会に発信していくつもりです(Y)。

参加するようになって、一年以上が経ちました。これは私が今まで関わってきた活動のどれとも違います。この活動部には、そこに来た人のそのままを受け入れる、そんな土台があると思います。否定されたり、矯正されたり、拒否されたりしない場所。弱さを受け入れ、共に悩み、足りない分は補ってくれる仲間。そして、最後はみんなで笑い合って終わろうよ、という雰囲気。これらの要素の一つ一つが、そう感じる原因だと思います。ある時は「なぜそのままいけないのか？(そのままではええやんか)」と問われることもあるし、「そのままがいい」と思っている人のそばに、そっと誰かが寄り添っていることもあります。

この活動は、世の中の「常識」を、肌で感じながらも疑問をもって生きてきた人たちが、「常識」という固い固い結び目を、少しずつほぐしていくようなものではないかと思っています(P)。

「ナニジン？」を制作して以降、活動は次のステップに移ったような気がした。色々なところへ、この作品を持って行って活動を説明したり、作品の感想をもらって、それをメンバーで共有して話しあったり。ひとつメディアがあるだけで、こんなにも繋がりや可能性は広がる。少なくともわたしにとって、「ナニジン？」は名刺のようなものだと思う。あるいは、マニフェスト。それはまず、この作品に登場する人たちのような人たちのことをいつも想像しながら、つまり簡単に見えづらくなってしまいう人たちのこと、見えづらくなってしまいうものごとを想像しながら活動しているから。

もうひとつは、この作品のスタンスが、聴きっぱなし投げっぱなしにしながら、それでもその人の言葉をじっくり待つ姿勢に貫かれているから。これも大事にしていることだろう。だから、「ナニジン？」は第一作として一番根っこ、大切にするとところをストレートに表現しているんだと思う。だって、「とりあえずこれ観てみて下さい」って自信を持って言えるもの。すごいことだ。

この根っこを大事にして集まるなかで、わたしのわたし自身のルーツについての捉え方もたくさんこねられた。でもそれは「ハーフ」や「クォーター」に出会ったからではなくて、ジェームズやゆきに出会ったからだし、メンバーのひとたちとつながり続けているからだ。

自分のルーツ、道行きを振り返る仕方それじたいが、その人の現在になっている。沖縄作戦はジェームズの道行きのなかの、ジェームズが「みんなにまだ言ってなかったこと」、「弱い部分」と呼ぶものを見せる旅、というコンセプト。わたしにはなんでそうしたいのか、最初はわからなかったけど、いまはなんとなく推理できる。人生の道行きの中でわたしたちがひみつにしたいものは必ずある。そのひみつは現在と切り離せないけれど、思い出すのが怖かったり、その道は間違ってたと思っていたりして、凍結保存されたままの柔らかいスライムみたいなものなのだと思う。自分のスライムを見せるには勇気がいるけれど、ジェームズはそれにこだわった。きっと、そういうタイミングだったから。

そしてジェームズとメンバーは単にひみつを明かすのではなくて、それを作品にして社会化している。ひみつ、ルーツ、社会。この結びつきのリアリティこそが大事だから。わたしたちは、きっとひみつで繋がっていきける。明かしても明かさなくても、それがあると互いに知ることによって繋がっていきける(F)。

「沖縄作戦」の撮影、編集作業や日頃の活動に参加して、ここまで自分のことを包み隠さず表現するジェームズの勇気に感心する気持ちを持ちました。それと同時に、この活動が見る人にどのような意味を持つのか不安にもなりました。

特に、ジェームズのこれまで、今の思いを描いた「沖縄作戦」は、ともすればジェームズの紹介ビデオと捉えられかねません。私自身、自分の言葉で「沖縄作戦」の主旨を説明出来ない焦りもありました。ジェームズ自身が感じたことを発信するのは何も悪いことではなく、価値のあることです。そして、ジェームズが発信することすべてに万人が共感することもないでしょうし、それはジェームズが望んでいることでもないでしょう。

しかし、世の中に何かを発信する以上、受け手を完全に無視することはできません。様々なルーツを持つ人が「沖縄作戦」を目にしたとき、どこかの場面で何かしら自分に重ね合わせることが出来る、そのような作品にしなければならないと思います。

ジェームズという一人の人間が、自分のことを自由に語り、表現する、そのことに意味を見出すのは、それぞれ違ったルーツを持つ私を含むジェームズ以外のメンバーだと思います。まず私たちが、どれだけ「沖縄作戦」を自分のものとして取り組めるか、その姿勢が、作品を観る人に伝われば、「沖縄作戦」は成功だと言えるでしょう。

ジェームズの大事な想いが、作品を観る人の中で、「他人事」で終わらず、一人の「ひと」のこととして捉えられるように、そしてそこから一步先に進んで、観る人それぞれが、「自分」と「ひと」との接点を見つけられるように、私はこれからも「沖縄作戦」をはじめとした活動に関わりたいと思います(N)。

この活動では多文化な背景をもつ若者たちが中心となって、「ハーフ」「ダブル」「混血児」「外国人」等のイメージや価値観を主流のメディアから一方的に「与えられる」のではなく、自らが表現し発信者となるための方法や力を獲得するために活動しています。昨年度制作した映像作品『ナニジン？ー トモダチ作戦』は DVD パッケージ化し、80 セット以上を頒布しています。その映像を活用し、各地での上映会や講演、大学ゼミとの交流等を通じて発信を続けるとともに、同じような背景や悩みをもつ人たちがつながれる場所になることを目指して活動しています。またさらなる映像制作や調査のため、沖縄をはじめ横浜、横須賀など各地におもむき、撮影、インタビュー、資料収集も重ねてきました。

この活動は単に「見栄えの良い」作品をつくりだすことが目的ではありません。発信したいメッセージが第一にあり、それを映像にまとめていくさいの過程もとても大切にされています。参加者は対等な立場でアイデアを出し合い、ゆっくりとしたペースで、協同でひとつの作品をつくりあげています。また多文化な背景をもつ若者が一方的に「支援される」という場でもありません。参加する皆が自然と自分のもつ価値観やアイデンティティについて考え、揺さぶられながら、ともに表現をおこなっていると言えるのではないのでしょうか。

現代の社会では、さまざまなメディアが「外国」「外国人」についてのメッセージを発しています。そこには多様な現実を見えなくしてしまうステレオタイプなイメージ、決まりきった価値観があふれています。本当の意味で多文化な社会を築いていくためにはそれらのメッセージと自分たちのもつイメージや価値観との関係を市民がとらえなおし、また自ら積極的に発信していくメディア・リテラシーが不可欠です。この活動はその具体的な取り組みとして、とても貴重なものだと考えます(B)。

「モヤモヤする」と打ち明けたことばに
すかさず「わかる！」と応答することば
「どうわかるの？」
つづきは沈黙の海に沈め込まれる

孤独について考える
だけど「孤独だ！」とさげふことで
孤独は消えさらない
共有されえない孤独をかいならす

わたしのモヤモヤとあなたのモヤモヤ
どこがどう似てて
どこがどうちがうんだろう
あなたの孤独とわたしの孤独は
やっぱりどこか似てて
やっぱりどこか違う

ひとりではおしつぶされそうになるから
自分がそうであるように
ほかにも悩んでいるひとがいるにちがいないから
場をつくる
共有するために
映像をつかったアクションで

成人式イベントの一角
等身大に近い「混血」のポスターをいっぱい飾って作品を流す
遠くの方で新成人が「おれのばあちゃん中国人」
と誇らしげにさげふ
中学生が「わたしのおばあちゃん韓国人やから、
わたしはクォーター？」と聞いてくる
一緒にいた友だちをよそに
本人さえも予期せぬカミングアウト
寒空のなか
恋するフューチャーダンスを踊るチャイナ服とモンゴル正装

「存在」は、容易にそして意図的に見えなくさせられる
てーげーぶではそれらが見える
見えたとき表現されたとき
ひとが出会い 出会い直し つながっていく
そんな場をつくる
いまいる人たちと
まだ出会えていない人たちの思いながら (I)

◆まとめと今後の課題

●若者たちのエンパワメント―「言葉」と「作品」、そして「トモダチ」

「ナニジン？」が作り手の元を離れ、世に出され、さまざまな人に届けられた。一年たって何より変わったことは活動するメンバーがこの作品を、自分自身や外国にルーツがある人たちを表現するものとして「自信」を持ってさまざまところで紹介していることだ。『「ナニジン？」は名刺のようなもの』『とりあえずこれ観て下さい』って自信を持っていえる」とまで言わしめるのは、作品のレベルや完成度という点では、おそらくないだろう。では、何が「自信」につながっているのだろうか。

昨年度、「疎外感」や「モヤモヤ」を表現しようと自分たちの存在を「ナニジン？」として形にした。実のところ出来上がったときには誰もがその作品をうまく説明する言葉を持ち合わせていなかった。やがて何度も自分たちで作品を見、上映し、観た人とのコミュニケーションを繰り返す中で、作品にのせて自分を表現する言葉を見つけ、観た人とのコミュニケーションの中でまた新たな言葉を発見し、自分自身や外国にルーツがある人たちを表現する言葉を更新していった。そうした一年を経て、「言葉」と「作品」がいま、若者たちの中に存在している。

一年たって手にしたのは「言葉」と「作品」だけではない。まだ十分にこなれていないが「トモダチ」というつながりも「自信」につながっているように思われる。メンバーの一人はこう言っている。『「ナニジン？」を制作するまでは、自分の葛藤や気持ちをわかってくれるのは同じルーツ、悩みを持つ人だけだと考えていた時期もありました。今思えば、その考えはとても閉鎖的だと思いますが、「そうじゃない」と強く思わせてくれたのは『「ナニジン？」と一緒に制作してくれた周りのトモダチでした』。別のメンバーはこうも言っている。「参加していくうちに一人で抱え込まず仲間と協力し合いながら作品を創りあげていく大切さ、定期的に集まれる場所の必要性、意見を交わしながら認め合うことの重要性を学ぶことができた」。

「見栄えの良い」作品をつくり出すことが目的ではない。活動が大事にしているのは、発信したいメッセージを大事にしながら、参加者が対等な立場で話し合い、互いに揺さぶられること。そのプロセス自体を「表現」ととらえている。それぞれの「言うのに力があること」。からだやこころの緊張が見えたり緊張が少し緩んだりする、そんな時間をともに過ごし、活動をつづけるなかで、「トモダチ」というつながりが少しずつ見えてきた。

●双方向のコミュニケーションを生み出すオルタナティブメディア

一年間の「ナニジン？」の反響や広まり方を振り返ってみると、一方的な一つの「正しさ」を伝えるのではなく、また作品だけが一人歩きするのでもない、観た人の「言葉」が作品に返ってきてあらたに作り替えられていくような、そんな作品の変化を見てきた。そう言いきれるのは、メンバーがなるべく上映に付き添い反応をうかがい観た人に感想をもらうようにしてきたからだ。

たとえば、「ナニジン？」を学習会で上映したいと連絡をくれた人がいる。その人は外国にルーツのある子どもにかかわっていて、この映像を子どもたちと一緒に観たいという。「ナニジン？」への「思い」や「使用の目的」について次のような感想をくれた。「このDVDは、外国にルーツがある人に対する思い込みに気付くことができます。学習のきっかけとして、参加者が自分を振り返るために使いたいと思います」「このDVDは「相手のことをよく知りたい、自分のことをよりよく知ってほしい」という思いに触れることができます」。その後、上映会は実施され、感想がまた送られてきた。

潜在的に多く存在する「ハーフ」「クォーター」「混血」など、外国にルーツがある人たちとメ

ディアを通じてつながることがプロジェクトの目的だが、その方法は、これまで一方的に押し付けられた「ハーフ」「クォーター」「混血」のイメージや価値観ではなく、自分たちの等身大の姿とメッセージを伝え、観た人に感じてもらうというものだ。メディアを通じてメッセージを送り、返答を待つ。観た人が何かを受け取り、何かを返す。そのやりとりの間に「ナニジン？」があり、両端に具体的な「あなた」と「わたし」がいる。感想はメールでも電話でも直接会ってでも伝えることができる。もちろん伝えないという選択肢もある。こうした送り手と受け手が一方的な関係性に陥らない、双方向的なコミュニケーションの可能性が見えてきた。

●「ないもの」とされる経験を共有し社会化する試み

新しい作品制作「沖縄作戦」では、一人の「混血」に焦点を当てかれの「過去・現在・未来」をたどる「沖縄」撮影合宿をおこなった。外国にルーツがある人たちの想いや経験は、誰もがそうであるようにとても個人的であり、同時に多くの共有されるべきものがある。かれが作品として共有したかった経験と想いはメディアや社会では「ないもの」として扱われている。それを可視化したことは大きなことだ。さらに大事なのは共有しようと思えた背景だ。かれは感想でこう語っている。「沖縄での挫折の経験が、いろんな意味で今の私の基礎となっています。その基礎であり、避けては通れない沖縄の地を現在一緒に活動しているトモダチと共に訪ねるのは本当に力がある事でした。でもこのトモダチなら訪ねられる、このトモダチだから訪ねたい、活動を通じてそう思えるトモダチに出会える事ができました」。

「ないもの」とされるものを、一人で「あるもの」にするのはかなりの力がある（マジョリティに一人で対抗するということだ）。「沖縄作戦」で結果的に意図せず行なわれていたのは、一人の「ないもの（とされているもの）」を、私たちの「あるもの」にしたということではないだろうか。経験と想いをみんなで身を以て体験することで共有し可視化した。

このことは次の課題へとつながっていった。経験を共有し社会化する試みのなかで、どれだけその経験を自分のこととして捉えられるか、つながりを見いだしていけるかということだ。「ジェームズの大事な想いが、作品を観る人の中で、『他人事』で終わらず、一人の『ひと』のこととして捉えられるように、そしてそこから一步先に進んで、観る人それぞれが、『自分』と『ひと』との接点を見つけられるように、私はこれからも『沖縄作戦』をはじめとした活動に関わりたいと思います」。メンバーのこの言葉の通り、これからが挑戦であろう。

●課題

新作を上映し、参加者とのコミュニケーションや対話を進める (①) と同時に、つながった人びとと緩やかに集まれる場の必要性も感じている。そのため交流の場をつくる (②)。これまでのプロジェクトをもとに、外国にルーツがある人びと（特に子どもや若者）がディスエンパワー（力を奪われる）される要因について社会提起し、関係機関との連携をはかっていく (③)。

①新作の上映とコミュニケーション

②外国にルーツのある人びととの緩やかなつながりの場をつくる

③ディスエンパワーされる要因について社会提案し、関係機関と連携する